
失色の明星～約束～

Liar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失色の明星〜約束〜

【Nコード】

N3498Z

【作者名】

L i a r

【あらすじ】

皆が僕を忘れますように。そう願って僕は眠りについた…はずだった。目が覚めるとそこは知らない遺跡で…テルカ・リュミレース？ここは一体…どこなんだ？

コードギアス反逆のルルーシュLOSTCOLORSとTOVのクロスオーバー

ギアス編終了後↓TOV

続いたり短編集だったり…すると思います。

魔導少女との出会い

未練はある。だから、未練はない。

皆が僕を忘れますように。

突然現れて、突然いなくなる僕なんかのために皆きつと心を痛めてしまう。だって彼らは優しいから。そんなのは嫌だから。

だから、忘れて。

それが僕の願い。

——おやすみ。

——おやすみ。

そして僕は眠りについた。

二度と目覚めるつもりはなかった。
だってこの力が皆を傷付けてしまうから。

なのに――。

「――つと、――き――よ!」

どこか遠くで誰かの声が聞こえた気がした。

それと同時に身体を揺すられている感覚がある。

その感覚に僕の意識が覚醒へと近づいて行くのを感じる。だんだんと誰かの声が近くなってくる気がした。

「ちよつとあんた!起きなさいって言っでんでしょ!」

「!」

突然ボリュームが大きくなったかのような感覚に驚き、僕は目を開いた。

そこには赤茶色の髪に緑色の瞳、そして和服と言えないこともないような不思議な服を着た少女がいた。

そしてその少女は僕を不審そうな目で睨み付けていた。

「やっと起きたわね！こんなところで堂々と眠りこけてるなんて、あんた一体何者よ？それに、どうやって入ったの！？今まで解かれた形跡のない仕掛けを解いて、私が今新しく発見した空間だっていうのに！！」

遺跡荒しなら容赦しないわよ、と少女は警戒した瞳で睨み付ける。

遺跡荒し？状況がよく飲み込めない僕は辺りを見回してみた。

僕はたしか神根島の遺跡で眠りについていたはずだ。

たしかにここは遺跡のようだ。しかし、ここは…神根島ではない？特徴とも言える巨大な扉がない。それに造りも違う。

「ちょっと！何黙り込んでんのよ！さっさと質問に答えなさいよ！」

少女の質問に答えることなく思考に耽っていたため、少女は我慢できないうように怒り出す。

慌てて僕は返事をした。

「あ、ああ、すまない…僕の名前はライ…質問に質問で返すように悪いんだが、ここはどこだ？僕の記憶が確かなら、神根島にいたはずなんだけど」

「は？」

少女は、僕の返事が予想外だったのか呆気に取られた顔をした。

「かみねじま？どこよそれ？聞いたことないわ。そもそもここ、島じゃないし、あんた何言ってるの？はぐらかしてるつもりなの？」

「はぐらかしているつもりはない。神根島は日本の太平洋沖にある島で…たしかにそれほど世間に知られているような島ではないと思うが…」

「にほん？たいへいよう？」

「わからないのか？」

「…さっきからわけわからないこと言ってる、やっぱりはぐらかそうとしてるんでしょ…」

あつたまくるわね！！と少女は憤る。

「違う。真面目に聞いているんだ。もう一度聞くんがここはどこなんだ？」

「…ここはシャイコス遺跡よ」

訝しそつにしながらも彼女は答えてくれた。だが、聞き覚えがない地名に僕は戸惑う。

「シャイコス遺跡？」

「アスピオの東にある遺跡」

「アスピオ？」

どの地名にも聞き覚えがない…一体ここはどこなんだ…どう考えても和名ではない。日本でないなら…ここはブリタニアか？
眠っている僕を誰かがブリタニアにでも運んだというのか？

「すまない、ここはもしかしてブリタニア領なのか？」

「ブリタニア？知らないわよそんなとこ。支配しているっていう意味での領地っていうなら帝都ザーフィアス領だけど？まさか知らないわけ無いでしょ？」

どんな生活しててもさすがに誰でもそれくらい知ってるわよと少女はさらに訝しむ。

「帝都？帝国なのか？」

「そうよ？このテルカ・リュミレースを治めているのはその帝国で、他に国家はないわ」

「他に国が…ない？そんな…まさか…」

ありえない、いや、数千年、数万年も眠っていたのならありえないこともないかもしれないが、眠るときに着ていたアッシュフォード学園の制服は劣化もしておらず、綺麗なままだ。そう時が経ったとは思えない。

「そうだ…地図、地図を持っていないか？できれば世界地図がいい」

「あーもう。なんなのよさっきから！！…一応、簡略的なのは持ってるけど」

「見せてくれないか？」

そう聞くと少女は仕方がなさそうにゴソゴソと手帳から紙切れを取り出した。

怒りながらも頼めばちゃんとお願いを聞いてくれている。そんな様子を僕は少し微笑ましく思った。

「ほら、これよ。これでもういい加減はぐらかすのやめなさいよね」

もううつんざりだ、というように少女から渡された地図を見て僕は息を飲んだ。

——違う。ここは違う。

ここは、日本じゃない。ブリタニアでもない。

ましてや

——地球でもなかった。

もし、もしもこれが地球だというのなら、少なくとも一回は人類は滅びているだろう。大陸の形…似ているとも言えなくはないがずいぶん地形が違う。

地殻変動どころの騒ぎではないし変動したのだとしても何千年程度でなんとかなるような変動ではない。

それほど時間が経過していないのは僕の着ている服から推測できるので、地殻変動の線は消していいだろう。

その上、地図に書いてある文字も読めない。話は通じるのに字が読めないとは一体どういう原理なのだろう…

とにかく何もかもが違う。

いつそ僕はまだ眠っているのかもしれない。そしてこれは夢なのかもしれない。だけど確かに僕はここにいるというのはどうしようもないほど現実で、僕が今いるこの場所は…一体、何だというのだろうか…。

「…どうしたのよ。いきなり黙りこんで。さあ、とつとと白状してお縄につきなさい。っていうか別にあんたの意見なんて聞かずにと

つとと捕まえるのが私的には一番楽なんだけど？むしろそっちの方が私らしいわよね。ま、今日は新しい場所見つけられて機嫌もいいし、あんたが暴れださないから話聞いてやってるけど、あ、暴れだしたときは容赦しないわよ」

少女は相変わらず僕を警戒している。当然といえば当然か。

「……すまない。ちよつと、信じがたいと思うんだがひとつ僕の話を書いて欲しい……」

「なによ？つまんない言い逃れなんか始めたら速攻引つ捕まえるからね」

「…違う。言い逃れなんかじゃない。僕としても信じがたい上に言いつらいことなただけど、僕は、多分、この世界の人間じゃない…と思う。僕はテルカ・リュミレースなんて知らないし、アスピオも、シャイコス遺跡も、ザーフィアスも知らない。僕がいたのは地球という星の、ブリタニア帝国が支配するイレブン、日本という国にいたはずなんだ」

「…はあ？」

これまで感じたことがないような憐れみ、蔑みの入り混じった冷たい視線がビシビシと突き刺さる。

自分がどれほど馬鹿な事を言っているのかわかっているだけにその

視線はわかるのだが、なかなか辛い。

「いや、自分でもすごいことを言っている自覚はある。そんな冷たい目をしないでくれ…」

「……何を言い出すかと思えば、ばっかじゃないの！？そんなもん信じられるわけ無いでしょ！！」

「すまない。だが、もう、そうとしか…」

「じゃあ、証明できるの？証拠は？」

「証拠…今身につけているものと言ったら、この制服と…」

僕は何かないものかとポケットを探る。何か硬いものが入っていた。

それは、僕の財布と、ないと不便だから、とミレイさんから支給された携帯電話だった。電源を入れてみると、まだバッテリーが残っていたようで立ち上がった。やはりまだそれほど時間が立っていないだろうか？

「なによそれ？」

少女は携帯電話に興味を示したようだった。

「これは携帯電話っていうんだけど。知らないか？」

「電話？知らない。どういふもののなの？」

「電波を通じて離れている人と会話できるんだ。あと、一瞬で手紙のようなものも送れる。ここでは、使えないけど。他にも、カメラとか、辞書とかの機能もついてる」

やはりというべきか、圏外だ。遺跡の中だからかもしれないが。

「嘘、そんな技術知らないわ…ちょっとそれ見せて!!」

半ばひつたくらわれるような形でケータイを奪われた。本当に興味津々に見ている。遺跡に来るくらいだからこの少女は研究者か何かなのだろうか。

ボタン操作に少々手間取っている少女に簡単な操作を教えてやった。するとだいたい理解したのか少女は先ほどとは打って変わって素早くケータイを操作していく。

「この材質…知らないし、この文字？も見たことない…これ、どういふ原理で動いてるの!？」

僕の知識で分かる範囲の説明を少女にしてやった。この時ばかりは無駄知識をありがとう、パトレー、という他ない。

少女はかなり理解力が良いのか、1教えたら10どころか100を知る勢いで理解していく。

辞書を開けば、もうおおまかにこちらの文字を理解したらしい。

曰く、古代遺跡の文字を解読するよりよっぽど楽。ちゃんと順序立って書かれてるから理解しやすい、だそうだ。

「なんか、楽しそうだね」

「だってこんな見たこともないモノ見せつけられてんのよ！？楽しいに決まってるじゃない！！」

「はは、それは良かった」

おもちゃを与えられた子供みたいに顔が爛々と輝き、すごく生き生きとしている。

まあ、子供だったか…

「カメラ？っていうのはどれ？」

「これだよ。それで、真ん中のボタンを押したら写真が撮れる」

「…！！なにこれ！？景色が…そのまま！！」

「そう。それで、撮ったデータはここに…」

「これ、今までのデータ？」

「そうだ。僕はあまりケータイを使わなかったから写真はそんなに

取っていないけど……」

しかしデータフォルダを開いてみると僕の予想に反して、数十枚のデータが入っていた。いつの間に撮られたのだろう。

「これ、あんた？」

「そうみたいだ。いつの間にか撮られていたみたいだな……」

……懐かしい。記憶を失っていた僕を受け入れてくれた優しい面々も写っていた。

ルルーシュに、スザクに、ミレイさん、シャーリイ、リヴアル、ニーナ、そしてカレン。生徒会メンバー全員の写真が残っていた。さすがにC・Cは写っていないかったけれど。

本当に、皆優しい人達だった。

未練はある、だから未練はないし、後悔もない。

だけど、やっぱり思い出すと……辛いものはある。

感傷的な考えを振り払うように僕はケータイに夢中な少女に話しかけた。

「それで、どうだ、やっぱりこれは証拠にはならないか？」

「……そうね、異世界っていうのは信じ難いけど、こう、物的証拠を見せられちゃ簡単に否定できないわね。少なくとも私は知らない技術だしすごく興味深い、これを覆す、あんたが異世界人じゃない

つていう証拠もない。信じてみる価値はありそうね。面白い研究対象だわ…」

「そうか…信じてくれてありがとう」

研究対象という言葉は聞かなかったことにして礼を述べる。

「べ、べつに礼を言われるようなことはしてないわよ!」

「だって、普通は信じないだろう。こんな突拍子も無いこと」

「それは証拠出されたからよ!」

「そうだとしても、ありがとう。嬉しい。ああ、そうだ君の名前を聞いていなかったな、名前を聞いてもいいか?」

「え?あ、ああ、そういえば言ってなかったわね。私はアスピオの魔道士のリタ。リタ・モルディオよ」

魔道士…?聞いたことがない。やはり、世界が違つと全く知らないことだらけなのか…

「そうか、リタ。ひとつ、相談があるんだけど、聞いてもらえないだろうか」

図々しいことは重々承知している。

「相談？なによ？言ってみなさい」

「この世界、テルカ・リュミレース…だったか？この世界のことを教えて欲しい。多分僕はこの世界で誰よりも世間知らずだと思う…」

先程から会話している時点で、なんと訳のわからない単語の多かったことが…

このままでは生活もできない。

普通なら生活よりも先に元の世界へ帰るよう努力したほうがいいの
だろうが、僕はもうあそこへ帰る気は最初からない。

帰りたい気持ちはない、帰る訳にはいかない。
だから僕は割と早い段階で覚悟を決めていた。

「……ふん。いいわ。でも、そのかわり、あんたの世界のことに
ついても教えなさい。等価交換よ」

「…ああ、構わない」

この世界の技術力がどの程度かはわからないが、おそらく、向こう
よりもこちらのほうが技術力はなさそうだ。

あまりオーバーテクノロジーなものはあまり教えないほうがいいだ
ろうと僕は思った。

「じゃ、あんた、あたしの家に住みなさい。私にも研究があるし、

あそこならあんたも資料に困らないはずだし。そうね、とりあえず助手つてことにして街に入れてもらうから、話し合わせときなさいよ」

「いいのか？」

「だってどうせあんた住むとこないんでしょ？」

願つてもない申し出だった。そうだ、住むところはなかったんだ。

「ああ、そういえば…じゃあ、しばらくおじゃまさせてもらう…早く自立できるように頑張ります…」

この少女にこれ以上の迷惑はかけられないなと思った。

「でも、両親の許可も得ないで勝手に決めても大丈夫なのか？」

「…いないわよ。両親なんて。物心ついたときにはずっと一人だったもの」

「…そうだったのか。すまない、思慮が足りなかった」

「別に…興味ないし。人なんてすぐ裏切るし、一人のほうが、楽なもの」

なんてことはないとすました顔をしてはいるが、先ほどまでと比べるとどこか表情が陰っているのがわかった。

誰かに裏切られたことがあるのだろうか…それに、ずっと一人で平気な子供などいるものか…彼女は頭がいい。その頭の良さで何かを感じて、何かを悟ってしまったのだろう。

だけど。

「リタ、それは違うと思う」

その考えは改めて欲しかった。誰も信じずに生きていくなんて、悲しすぎるから。

「は？何がよ？」

「確かに、誰かを裏切る人間はたくさんいる、だけど、本当に優しい人たちもたくさんいる」

僕も昔は陰謀、策略なんかは日常茶飯事、何度裏切られたことが…だけど、確かに優しい人はいる。たった数週間の間だったけど、僕にそれを教えてくれた人達がいた。

「それに、人はひとりじゃ生きていけない。形は人それぞれだけど、少なくとも僕は、誰かがいないと、生きていたいと思えない」

そう、それは数百年前の自分。妹と、母がいなければあの時の自分はどうしていただろうか。

「…それはあんたの話でしょ。あんたが弱いだけじゃない。あたしは違う、ひとりでも生きていける！生きてきたの！！あんたなんかと一緒にしないで」

そう言うとリタは視線を逸らした。

「じゃあどうして視線を逸したんだ？」

「……………」

「本当は、わかっているんだろう？君は頭がいいから、何でも合理的、論理的に考えて、納得してる。すべての人を信じるなんて言わないさ、確かに裏切る人間もいるから。だけど、せめて、僕を信じてみて欲しい。まあ、異世界から来ましたなんていう人間なんて簡単に信じられないと思うけど…。君がどうしてもという結論に至ったのかはわからないが、結論を出すのはまだ早いんじゃないか？もう一度、人を信じてみて欲しい。そうだな、少なくとも僕は、君を裏切らないと約束する」

「なんで今日会ったばっかのあんたにそんな事言われなきゃならないのよ。関係無いでしょ！！」

「関係ある。だって、今のリタ、悲しそうだ」

声を荒らげて自分の感情をごまかしているのが手に取るようにわかる。

先程から態度は悪くても、こちらが聞いたことにはなんだかんだで答えてくれた。きっとこの少女は態度に出すのが苦手なだけで、とても優しい娘なんだろうなと思った。

それは、おそらく、親がいない環境で育ったために、甘えるということを知らないから……。

僕には優しい母がいた。それは、小さいことのように、とても大きいことだったんだろう。あの環境に母がいなければ僕は……考えたくないな。

「はあ！？バカっぱい。それこそ関係ないじゃない！！」

「あるさ。君が悲しんでいると僕も悲しくなる。さっき君はすごく楽しそうにケータイ弄っていたな。僕はあの時、正直僕は知らないところに放り出されて結構参っていた。だけど君が楽しそうにしてるのを見て僕も楽しい気持ちになれた」

「……何が言いたいわけ？」

「こんな訳のわからない状況でも、誰かがそこにいて、楽しそうにしていれば不思議とこちらも楽しくなる。その逆も然り……君が悲しんでいると僕も悲しいっていうこと、わかって欲しい」

「私は別にあんたが悲しんでようがなんとも思わないけど？」

「はは、手厳しいな。それは、君が僕のことを信じてないからだ。」

「…なによそれ、じゃああんたはあたしのこと信じてるっていうの？」

「そうだな」

「出会って数時間しか立ってないのに？あたしを？」

「君だって、こんな怪しい人間の怪しい言葉を信じてくれたじゃないか」

「それは物的証拠があったからで…これから私が自警団にあんたを突き出すとか考えないわけ？あんた絶対人に騙されるタイプでしょ」

「いいや、それでも人を見る目は養ってきたつもりだ。騙されたことはないな。それとも、突き出すのか？」

「…出さないけど」

ならもうこの話は終わりだと言うように僕はリタの頭をグリグリと撫でる。

こんな怪しい人間の、怪しい言葉を信じてくれた、素直な娘。そして誰かに甘えるということを知らずに生きてきたのであろう、虚勢を張り続けるこの少女を、せめて僕がいる間は、精一杯甘やかしてやりたいなと思った。

「にゃー！！頭撫でるな！！なんなのよ一体！！」

「とりあえずさっき言ったこと、心に留めておいて欲しい。…じゃあ今日から短い間だと思いますがですがお世話になります。リタ先生」

できる限り早く知識を身につけてリタの迷惑にならないようにしたい。

「は？先生？」

「とりあえず色々教わるわけだし」

「いらないわよそんなの！！気持ち悪い！！」

「そうか？まあ、とにかく信頼されるよう頑張るから、よろしく」

「……なによそれ…バカっぽい…」

リタはぷいと顔を背ける。

いつかこの少女に知ってもらいたいと思った。

僕が知った、世界は色鮮やかで、暖かい人たちで溢れているということ。

自己満足でも良い。それでも、きっとそちらの方が今より幸せだと
感じる事が出来ると思うから。

（そう言えばリタって今何歳なんだ？）

（13だけど？あんたは？）

（1…6、7かな？）

（何で疑問系なのよ）

（ちょっと、色々あって…）

（言いたくないなら良いけど別に。私には関係ないし）

（いつか、話す）

（……っふん）

魔導少女との出会い（後書き）

浮気しました。

リタが好きです。ライも好きです。

だから会わせました。ちょっとした出来心だったんです…ごめんなさい。

天然君とツンデレちゃんの組み合わせ好きです。はい。

昔好きなキャラ列挙してみたところ好きなキャラの傾向がブレなさ過ぎて驚いたのは私です。

↑

感想評価等頂けましたら励みになります。

感想じゃなくとも趣味合いそうな方話しかけて下さると喜びます。
同士いたらいいのになぁ。

遺跡の中で

僕とリタはまだ遺跡の中にいた。彼女は初めて発見したというこの空間を見過ごすことは出来ず、調査をしてから僕をアスピオという街まで案内してくれるのだという。

改めてみるとこの遺跡結構な広さである。相当に老朽化しているのか、倒れた柱や崩れ落ちた天井等、相当に古い遺跡のようだ。

しかし、リタは一体何の調査するつもりなんだろうか？この遺跡には一体どのような歴史が刻まれているというのだろうか？

異文化人にもほどがある僕が聞いた所で、おそらく理解出来ないだろうと判断し、今は邪魔することなくおとなしくリタを見守ることにした。

でも、ただ待っているだけというのも退屈なので、僕も遺跡を見て回ってみることにする。

遺跡内を歩きまわる。遺跡内といっても僕が最初にいたホールのような空間だけだ。

その理由は僕がちょっとホール内から出ようかと試みたところ、リタに自分の見ていないところで勝手に色々触られては困る叱られたためだ。

僕はそういうものかと納得し、言うことを聞いた。

そしてなんとなしにホールを見渡すとなにかを見つけた。

リタの許可を取ったほうが良いものかと考えリタを見たが、彼女は彼女で何かを見つけたらしくそちらに夢中で、話しかけると邪魔をするなど怒られてしまった。

壊さなければいいだろうと、とりあえず近づいて一体そこに何があるのか見ることにした。

これは…

「…箱？」

大きめの箱がポツンと置かれている。何かの罨だろうか？

リタの判断を仰ごうと思ったが彼女はまだ何かに夢中らしく、話しかけないほうがよさそうだ。

しかしこの箱…気になる…。罨：開けたら毒ガスか？それとも弓が飛んでくる？まさか遺跡が崩壊するような恐ろしい罨でも仕掛けられているのだろうか？

僕はとりあえず箱の周りを入念にチェックする。少なくとも箱の周囲には罨を張られている形跡はない。だが、中に何か仕掛けられている可能性も否めない。

「なにやってんの？」

うんうんと僕が捻っていると、背後からリタに声をかけられた。どうやら調査が一段落したらしい。

そして僕は先程から頭を抱えている問題をリタに打ち明ける。

「これ…箱を見つけたんだけど、何が入っているんだろうって」

畏かもしれないと考え込んでいたのだが、リタは驚くほど簡単に返す。

「あー…それ？開けたら？」

「え？いいのか？」

「いーのいーの。開けちゃいなさい」

「でも、遺跡荒らしの畏とかあるんじゃないのか？」

大丈夫だと、なんてこともなさそうにリタが答えてくる。

「じゃあ、開けてみる…」

リタを疑うわけではないが、若干緊張しながら箱の蓋を開く。
そこには刀と脇差が一本ずつ入っていた。どういうことが保存状態は非常に良さそうだ。

「……刀？どうして日本刀がこんな所に……」

まさか日本の文化がこの世界にあるとでも言うのだろうか？

僕は思わず刀を手にとった。すごく美しい刀だと思った。刃を見ると三日月状の打ち除けがある。これは、まさか……な。

銘を確認してみるとなにか書かれている。さすがに日本語ではないらしい。

「あんだ、その剣知ってんの？」

「ここでは何と呼ばれているのか知らないが、これは僕の世界で日本刀と呼ばれているものに属する武器だ。リタ、このところ、なにか書かれているみたいなんだがなんて書かれているんだ？」

「なになにー、あーこれ古代語で書かれてるわね。えーと、サンジヨウ？あたし武器とか専門じゃないから詳しいことはわかんないわ」

……日本で三条銘の三日月状の打ち除けといえば、三日月宗近と呼ばれる有名な日本刀があるが、これは偶然か？

この世界の古代には日本があつたのかと考えてしまったが、文字が違うので却下。

似たような文明があつたのだろうと納得することにする。考えてもきりがない。

「そう、か。ありがとうリタ。それで、これどうしようか？」

刀など持ち歩いていたら、それこそ自警団とやらの捕まるのではないだろうか？

というか、普通に刀が落ちている時点で僕としては驚きなのだが、貰ってもいいのだろうか？そして、この世界は本当に一体どういうものなんだろう。

「あんた刀使える？」

「使えるって…？」

「扱えるのかってことよ」

僕が王だった時代、母が日本の皇族であったため、譲り受けた日本刀を使う機会も多かった。実戦でも主な武器として扱っていた。そのため、扱えると聞かれれば扱えるのだが、質問の意図するところを掴みかねる。

「扱えるが…どうかしたか？」

「じゃ、もらつとけば？」

役に立つし、とリタはサラッと衝撃的なことを言う。

刀が役に立つとは、この世界は戦争でも起こっているのか？しかし、先程帝国はひとつしかないと言っていた。敵対国が無いの

なら新たな勢力が生まれつつあるという以外に戦争の可能性なさそうだ。

「刀なんて、外で持ち歩いて問題ないのか？」

「はあ？何言ってるの？外出るのに丸腰のほうがよっぽど危ないじゃない。街ならまだしも、ここみたいに街の外に出るんなら武器なしじゃ生きて行けないわよ」

「どうして？」

心からの疑問だった。そして答えたリタの言葉は僕にとって衝撃的なものだった。

「どうしてって、そんなの、魔物とか盗賊とかが襲ってくるからに決まってるでしょ？」

むしろ、僕よりもリタのほうが不思議そうに返してきた。あんた何いってるの？と言われなくとも伝わってくる。

それは置いておいて、聞き捨てならない単語があった。

「魔物？」

「ええ」

魔物と言われて思いつくのはファンタジー小説なんかに出てくるような架空の生物なのだが。

「魔物って、あの？」

「いや、あの魔物とか言われても、魔物なんてごまんといるんだからどの魔物かなんて知らないわよ」

僕が聞きたいのはそういう事ではない。

「ここには魔物というものがいるのか！？どんなものだ？」

「…魔物は魔物でしょ。モンスター。まさか、知らないの？」

「そんなものいなかった。大きく分けてヒトかその他の動物程度の分類しかない。一応聞くけど、魔物っていうのは犬とか猫とかライオンとかとは、違う？」

「猫と魔物一緒にするなんてありえないから！！やめてくれる！？不愉快よ」

リタは猫好きなんだろうか？犬に対してはどうでもいいのか。

「すまない。でも、多分理解した。そうか、魔物が出るのか…それは危ないな」

魔物が出るとは予想外だ。この刀、三日月宗近（仮）をありがたく頂くことにしよう。

ちなみに、脇差の方は無銘だった。しかし刃は研ぎ澄まされて切れ味は凄そうだ。

「このホール出たところから魔物出るからちゃんと警戒しときなさいよ。背後から襲われるってこともあるんだから」

「本当か！？気を付ける。と言うよりリタは魔物が出るっていうのにこんな所に一人で来たのか？大丈夫か？」

僕のことよりリタのほうが心配だった。見たところ武器も持っていない。

魔物の生態というのがどのようなものかはよくわからないが、危なすぎるだろう。

「大丈夫だからここにいるんじゃない」

「でも武器は？見たところ、何も持っていないように見えるんだが……」

「あるじゃない」

これよこれ、とリタは帯と本を指さす。

「…魔物っていうのはそんなひらひらしたものと、本で撃退できるものなのか？」

確かに分厚い本の角で殴られたら痛いだろう。痛いだろうけど。

例えば魔物を人を襲うライオンと仮定して考えてみよう。今にも襲いかかってきそうなライオンと、本と帯で戦えと言われたら誰もが無謀だと返すだろう。

牛なら帯で避けることくらいならできるかもしれないが…

「ま、できないこともないけどね。ま、あともう一つ武器あるし。っていうかあたしの主力はそっちだから」

「どーにっ？」

どう見ても何も無い。尋ねてもどうせ戦闘になったらわかるわよと教えてくれなかった。

僕は、不安に苛まれつつ、リタとホールを後にした。

「えっと、あそこに何かいるんだけど。大きいオタマジャクシが。もしかしてあれが…」

「魔物よ」

ついでに大きいカエルまでいる。あれが、魔物…。ライオンのほうがよっぽど魔物なのではないかと少々拍子抜けしてしまったのは秘密だ。

僕は刀を抜き敵の動きを観察する。オタマジャクシたちはこちらに気がついたのか、ピョンピョンと飛び跳ねながらこちらに近づいてくる。

「リタ！！下がれ！！」

「は？何を…！？」

リタを自分の背後に回し、相手の出方を伺う。するとオタマジャクシが飛び掛ってきた。

僕は瞬時に刀を振り下ろしオタマジャクシを斬り飛ばす。オタマジャクシは真つ二つになり、もう動かない。

この刀すごい切れ味だ…。かなりの業物のようだ。それこそ三日月宗近といってもいいほどだろう。

感心するのもつかの間、今度はカエルとオタマジャクシが様々な方向から攻撃を仕掛けてくる。

しかし――

「遅い!!」

ピョンピョンと単純な攻撃しかしてこないため簡単にかわせる。かわしたところではやく刀を振り魔物を切り裂いた。

あと一匹少々離れたところにいる。僕はすぐさま駆け寄り倒しにかかろうとした、すると――

「今度はあんたが下がってなさい!揺らめく焔、猛追!ファイアーボール!!」

リタが叫んだかと思うと、火球がオタマジャクシに向かって飛んでいく。火球は見事命中し、魔物は動かなくなった。

「今…のは?火の玉が…リタから?」

「ふーん。やっぱり魔術も知らないのね。予想はしてたけど。あんなの世界には魔術もないわけね」

「魔術…そんなものまであるのかここには…あちらにはなかったよ。魔法も魔物も、空想の物語だ。物理と科学の法則がすべてだったからな」

「あたしに言わせれば魔術も科学の一部だけど？」

「あちらには何も無いところから火球を出すようなものを科学とは言わない。言ってしまうえば奇跡だろうな」

「奇跡ねえ…その考えのほうを理解できないわ。それにしてもあんな…武醒魔導器も無いのによく戦えたわね…」

ボーディブラスティア？また聞いたことのない…

意味がわからず首を傾げる。するとリタは自分のチョーカーの宝石のようなものを指さした。

「簡単に言うと、これを着けると、着けてる人間の能力を底上げしてくれるの」

おまけに魔導器というものについて熱く語られてしまった。まさに熱弁を振るわれてしまった…おかげで魔導器についてはよく理解することができたように思う…。

「…ここは本当に不思議な世界だな…」

「あたしから言わせればあんたのほうがよっぽど不思議なんだけど！未開の遺跡で眠っていたかと思えば、異世界人だの言い出すわ、魔物も魔術も魔導器も知らないし、しまいにはこのあたしに説教までかましてくれちゃうし、ほんと意味が分からないわ」

魔導器がない世界なんてかんづがえらんない！！とリタは力強く語る。

どんな生活してるのかなんて、考えたくもないらしい。そんなリタに僕は苦笑する。

リタは魔導器にご執心らしい。先ほどホールで見つけたのも魔導器だったようで、すでに名前をつけてかわいがっている。

「ま、とにかくアスピオに向かいましょ。話はそれからね」

「ああ、そうだな……」

次々に現れる魔物を倒しつつ、アスピオへと向かうのだった。

（その魔術って強力だけど、発動までの間隙だらけだ。ほんとに今まで大丈夫だったのか？）

（うるっさいわね！。大丈夫だからここにいて言うてんでしょー）

（怪我とかしていないんないけど、心配だ。また調べに来るんなら僕も手伝うから言うてくれ）

（…余計なお世話よ。…ばかっぽい）

遺跡の中で（後書き）

気まぐれ更新です。

本当に。

今はアレです。リタを愛でたい衝動と現実逃避したい衝動が合わさってこんなことになっております↑

これから再び現実へ戻ります↑

ライは直剣、大剣その他もろもろも使いこなせるとおもいます多分でもあえての日本刀なのはただの趣味です。

日本刀カッコイイじゃないですか、綺麗じゃないですか？え？そうでもない？

そう言えば今、アッシュフォード学園の制服に刀と脇差の構図ですね……制服に刀か…良いと思う↑

ここまで読んでくださっている方、本当にありがとうございます。感想等ありましたらぜひよろしく願います。励みになります。

魔道士の街、アスピオ

「ここがアスピオ…？」

リタ先導のもと、僕はアスピオと言う街に到着した。

遺跡を出たとき、そこに広がる広大な大地に驚いたのもつかの間、次々と襲いかかってくる魔物を斬っては捨て斬っては捨て、ようやくここまで辿り着いたのだった。

僕は普通の街を想像していたのだが、ここは洞窟を掘り広げたような場所に家を建てて生活している、変わった街だった。

夏は涼しく、冬は寒そうである。実際のところどうなのかしらないが、ついでに街の中は洞窟に街灯が立っているだけのようなのなので当然暗い。

街の中にいると時間の感覚が無くなってしまいそうである。

そう言えば、今こうして普通にアスピオ内にいるわけだが、この街には門番があり、本来通り抜けるためには通行証が必要らしいのだが、リタが門番に僕のことを助手だと述べると、呆気ないほど簡単に街に入ることができた。

ちよつと警備がザル過ぎるのではないのかと思ったが、聞けば通行証は国や中の研究員が発行するものらしく、リタと並んでいればとりあえずは問題のないことなのかもしれない。

それでも、顔パスが通じると言うのはすごいことのように思う。
当然、顔を知られていないと顔パスなど到底できるはずがないのだが、聞けばアスピオには何百人という研究者が集っているというではないか。

門番がアスピオの研究者全員の顔と名前を暗記しているとも思えない。

もしかすると、いや、やはり言うべきか、リタはこの若さでもかなりすごい研究者なのかもしれない。若いから、というのもあるかもしれないが…。

少なくともここでは名が知れ渡っているようだ。

出会って数時間だが会話の端々で彼女の聡明さ…知識の深さとと理解力、記憶力に驚かされることが多々あった。

彼女はすでに僕の世界の文字とこちらの世界の文字との法則性を理解し、ほぼ完璧に読めるようになっていた。

文字が違っただけで読み方と意味は同じらしい。リタに言わせれば覚えるのは楽勝、だそうだ。

どうやらテルカ・リュミレースの文字、テルカ文字とでも言おうか、テルカ文字はアルファベットと全く同じ規則性のようだった。

アルファベットをそのまま変形したようなものがテルカ文字らしい。リタから見れば、テルカ文字を変形したのがアルファベットか。

リタにケータイを見せて、一通りの読み方を教えたとき、リタはすぐにそれに気づき、理解したのだ。

さらにケータイには辞書機能何て言うものが付いていたのだから、理解に要する時間はより少なかっただろう。

それは、一度理解してしまえばたしかに単純なことかもしれないが、

それを数分で憶えて、解読してしまうリタの頭脳は計り知れないと思う。

僕もリタにテルカ文字とアルファベットの同じ文字を書いてもらって見たのが、テルカ文字はこう、根本は同じだとわかっていても、あれ？ここ、こうなるんだ？

という、頭がこんがらがってしまいそうな変形をしており、覚えるのは僕には難しそうだと感じた。

常人ならば、一つ一つ表をつくって、交互ににらめっこしながら解読していくところではないだろうか？

しかしリタはあっという間に理解して解読したのだ。本当にすごいと思う。

むしろ、アルファベットのほうがテルカ文字よりも一つ一つの文字の違いがはつきりしていてわかりやすいわね、今度からこっちをおうかしら、とまで言う始末である。

これからテルカ文字を覚えようかと意気込んでいた僕は思わず苦笑してしまった。

リタの頭の良さについての考察はこれくらいにするとして、この街、本当に夜みたいに暗い。

研究員と思しき者たちは皆フードを被っており、顔が見えない。今この街で顔を出して歩いているのは僕とリタだけではないだろうか。それが珍しいのか、フードで顔が見えないながらも時折アスピオの住人たちの視線を感じた。ああ、そういえばさらに僕は学生服を着ていた。

これがさらに注目を集めてしまう要因になってしまっている気がする…。

こればかりは仕方のないことだが、奇異の目で見られてしまうのはどうにも少し居心地が悪いと感じた。

僕もフードとマント、欲しいかもしれない。

「ほら、こつちよ」

リタは中央広場、門側から見て右奥にある小屋に案内してくれた。中央広場から見た感じ、家はここにしかないようだ。1つだけぽつんと家が建っている。

更に奥には研究施設のような大きい建物があったが、他の研究員はそちらで過ごしているらしいのだが、リタだけはこういうわけか小屋をあてがわれているようだ。

リタが小屋の鍵を開け、中に入る。

「うわー!!」

「ちよっ！なによ？」

外から見た感じから、不思議なデザインだなとは思っていたが、小屋の中は床から天井へと結晶の柱のようなものが突き抜けていた。建ててから生えたのか、生えていたところに建てたのかは謎だが、

相当に驚いた。

後者ならともかく、前者だったら怖すぎると思う。

ついでに、床を多い隠さんばかりに広がっている分厚い本、本の山。

これまでベッドに机くらいしかない生活に慣れていたせいもあり、少々目を向いてしまった。

「水晶？結晶みたいなものが、突き抜けてるけど、大丈夫なのか！？」

「さあ？大丈夫なんじゃない？」

リタはさも興味が無いといった様子だ。

これはこれで安定感がある…のかもしれないな。

家主が気にしていないのだから、僕が気にするのは野暮というものが。

「ま、とりあえず、テキトーに座ったら？」

そうリタに言われたので適当に座る場所を作り腰を下ろした。持っていた刀と脇差も床に置いた。

「で、これからあんたどうするつもりなの？」

「正直考えていない…この世界のことよくわからないし、元の世界に帰りたいとか言う大義名分もないんだ。でも今はとりあえずこの世界のことを学んで、出来る限りリタの迷惑にならないようにしたいと思ってる」

考えていることをリタに正直に述べた。この世界がどのように成り立っているのかもわからないままでは、自立なんて到底できない。あえて言うなら早く自分で稼いで生活するのが目標といったところか。

稼ぐと言えば…どういう原理か知らないが、魔物を倒したらこの世界のお金を落としていたな。まさか…人を食べ…いやいやそんなことは、と嫌な考えを振り払う。

「ふーん。ま、とりあえず文字ね。文字さえ覚えればこの街の図書館使って色々知識詰め込めれると思うわよ」

腐っても学術都市だから、知財だけは豊富なのよね」とリタは言う。

「う。文字か…さっき少しだけリタに教えてもらったけど、アレを覚えるの少し時間がかかりそうだな…」

「そ？ちよつと変形してるだけじゃない。単語も構文も同じなんだから形さえ覚えたら後は考える必要ないじゃない」

「そうは言うが…いや、うん、頑張るよ。表でも作ればすぐに覚

えられると思う…それで本当に申し訳ないんだが僕はこの世界の文字はさっぱりわからない。僕がアルファベットの表を作るから、その隣にテルカ文字で当てはまる字を書いて欲しい…」

「そんなのでいいんなら、構わないわ」

「ありがとう」

「べ、別にお礼言われる筋合いはないわよ！」

「いや、あると思うぞ？」

とにかく助かった。すぐにでも文字を覚えて勉強したい。

「あーもう！そういうの知らないから！と、とにかく、今日からあなたはこの家で好きに過ごして構わないから！勝手にしてちょうだい」

あなたはあたしの貴重な研究サンプルなんだから、勝手に出てったりしたら許さないからね！と付け加えられた。

研究サンプルって…たしかに研究者からしてみれば異世界人間など興味の対象だろうが…こうはつきり言われるといっそ清々しいな。

「ありがとう。何から何までお世話になって…」

「あ、あたしがいつあなたの世話したっていうのよ！そういうのい

らないって言うてんでしょー!!」

そして、さっきから気になっていることがあるのだが。

「ところでリタ」

「なによ?」

「部屋……片付けてもいいかな?」

「……勝手にすれば?」

それから数時間にわたって、ほんの位置がわからなくなっただけは困るというリタ監督のもと、僕と本との戦いが行われたのだった。

掃除の最中、どこかも覚えのある物を発見した。

「あ、これ、もしかして掃除機?」

「なんで知ってんの!?!」

あたしが作ったのに！！とリタが本気で驚いている。

「あ、いや、これと似たものがむこうにもあったから、それで…つてリタが作ったのか！？これ！！」

「え？あ、うん。そうだけど？」

「それは…すごいな…」

「なんで？あんたの世界にもあるんでしょ？」

「あるにはあるが…自作する人間はそうはいないと思う…作り方を知ってる人はなかないと思うし」

いるとすれば相当メカに強い、機械づくりが趣味の者だけだろう。

「じゃあどうやって作ってんの？」

「工場で、大量生産…されてるんじゃないかな。」

「大量生産！？これを！？魔導器足りの！？って、ああ、そういえばあんたの世界には魔導器ないんだったわね…いいわ、あまり聞きたくない。魔導器がない世界なんて考えるだけでも恐ろしいわ…」

「そ、そうか…」

やはりリタにとって魔導器は何よりも大切なモノなのだろうなと、感じ取った。

突如、ぐうと低い音が響いた。リタを見ると顔を赤くして横を向いている。

音の正体はどうやらリタのお腹らしい。いい時間になったようだ。必死に顔をそむけているリタを見て、僕は思わず笑ってしまった。

「ちょ、何笑ってんの！？今は別に！！」

「ご飯にしよう。食材はあるのか？」

「……ない」

「え？じゃあ、いつもどうしてるんだ？」

「食堂とか……」

「そうなのか……じゃあその食堂、行く？」

「……うん」

そうしてアスピオの食堂の状態を経験した僕は、これから自炊すべきだなと、強く思ったのだった。

（リタ、あれは成長期の子が食べ続けていい食事じゃないぞ…）

（普通じゃない？美味しいし）

（いや、食に疎い僕でもわかる…さすが研究の街…食べる時間の速さ時間重視の上に片手で食べやすい物ばかりだった…）

（ま、正直研究には食事の時間ももったいないからねー）

（……これから頑張ろう）

魔道士の街、アスピオ（後書き）

気がつけば、ライが主夫化しそう…

ライのシスコンスキルを発動させるか、過保護スキルを発動させるか、天然スキルを発動させるか、王子様系スキルを発揮させるか…
いっそ全部発動させるか…↑

ここまで読んでくださった方ありがとうございます。
感想評価アドバイス等ありましたらぜひ。

くアスピオ Side・R・M

あたしはアスピオからシャイコス遺跡へ一人で調査にやって来ていた。

この遺跡にはまだまだ魔導器が眠っているはず。あたしが必ず全て探し出して蘇らせてみせる。

そう、あたしは魔導器を愛している。魔導器は私を裏切らないから。一心に愛を注ぎ込めば、魔導器は必ずそれに応えてくれる。

魔導器があたしを裏切るのはあたしが魔導器を裏切ったときだけ。正しく扱わなければ魔導器はたちまち人に害をなすものとなってしまふ。

けどあたしは魔導器を裏切らないし、だから魔導器もあたしを裏切らない。

それでいい、魔導器を愛すること、それがあたしの全てだから。

そして今日、遺跡の仕掛けを解き、新たな空間を見つけた。

何が眠っているのかと、高鳴る胸を押さえつつホールへと入った。

そしてそこであたしは見つけたのだ。

ホールの中心に横たわる銀色を。

あたしより先にこの仕掛けを解いた者はいないはずなのに！これは一体どういうことなのか！

何処から入ったの！？いいえ、それ以前にあれば生きているの！？
というか人間？

あたしはその銀色に駆け寄った。

ホールの真ん中にいた銀色は、銀髪で色白の男だった。歳はあたしよりいくつか年上と言ったところだろう。

閉じられている瞳は長いまつげで覆われており、まるで死んでいるかのように動かない。

まるで精巧な人形のようなと思った。男の整った顔立ちがその印象をより強くする。

しかし僅かに胸が上下していることから、生きていることがわかる。

そしてこの男は、黒を基調とした、見たこともない服のようなを着ていた。

まああたしは世間のファッションだとかに疎い、と言うか興味が無いので、ただあたしが知らないだけかもしれないけど…

この男は一体何者？なんでこんな所で眠っているのか、どうやってここに入ったのか？どうしてここに居るのか？

考えてもわからないことばかりで、そのことに苛つきを感じたあたしは、これでもかというほどに男を揺すってやった。

自分の頭を悩ませている張本人が遺跡のど真ん中で爆睡だとかありえないでしょ！なにより起こして聞き出したほうがずっと早い！

しかしこの男、揺すっても揺すってもなかなか起きる気配がない。

「つく！起きなさいよ！この！」

もはやしばいているのだが、男はまだ起きない。

「起きなさいって…言っでんでしょ!!」

あらん限りの大声で叫ぶと、ぴくりと男の瞳が揺らいだ。かと思うと男はぱちりと目を開いた。

男の瞳は深い蒼色でその銀と蒼のコントラストにあたしは一瞬目を奪われた。本当に一瞬だけなんだからね!!

あたしはすべての疑問を男に叩きつけた。しかし男は周りをキョロキョロと見渡すばかりで、あたしの質問に答えようとしない。

質問にくらい答えなさいよ!と、あたしはだんだんと怒りがこみ上げてきて、再び男を問い詰めた。

「あ、ああ、すまない…僕の名前はライ…質問に質問で返すように悪いんだが、ここはどこだ?僕の記憶が確かなら、神根島にいたはずなんだけど」

「は?」

ライと名乗った男は、ようやくあたしの質問に答えたのかと思ったら、訳のわからないことを言い出したのだ。

終いには、自分が異世界から来たなどと言い出す始末。

何よこの男…ふざけてんじゃないわよ…あたしを子供だと思って馬

鹿にしてんじゃないでしょうね…。

異世界人から来ました等と言われて、あらそうですか、大変ですね、おほほほ。

とても言うと思ってんのこいつは！？ナメられたもんよね、このリタ・モルディオともあるう者が。

ここは、こいつのデタラメなど、丁重に論破してやろうと証拠の提示を求めてやった。

ふふん。異世界なんてありえない。証拠などあるはずもないだろう。これでこいつのデタラメなど簡単に覆すことができる…。

しかし私の予想に反してこいつは自分の持ち物をチェックし始めたかと思うと、見たこともないものを取り出した。

携帯電話と言ったそれは、あたしも見たことのない材質と、技術と、原理で動いている不思議なものだった。

そして見たことのない文字が書かれていた。形が違っただけの文字だったが、ただ形が違っただけではないかと言うには妙に手が込んでいる。

自分の知識にはない上に理解し難いものを差し出されてしまい、あたしはこいつが異世界人であるということ、疑い半分、信じてみるという結論に至ったのだった。

こいつの世界には魔導器も、魔術も、魔物もないらしい。あたしにはそれが全く信じられない。

魔導器がない？ありえないありえない。そんな世界があるなんて。そんな世界のこの話は聞きたくない興味もない。だけど研究者と

しての自分の好奇心も捨てきれず、結果異世界から来たというこの男を自分の近くに置くことに決めた。

調べればそんな世界など無いと断定できるかもしれないし、逆に、本当に異世界から来たのだと断定もできるかもしれない。

とにかくあたしは曖昧なまま終わらせるようなことはしたくない。

白黒はつきりつけてやろうじゃない。

それなのにこの男はあたしにありがとうだとか言い出してきた。お礼を言われるようなことなど一つもしていない。

あくまで研究サンプルとして置いておくことにしただけなのに、あたしはあたしのためにこうすることに決めたのに、言ってしまうばあたしはこいつを利用してようとしているだけなのに、礼など言われる筋合いは毛頭ない。

かと思えばこのあたしに説教をかましてきたりしてほんとうに意味が分からないやつ。

人を信じるだの信じないだの、裏切らないだのバカっぽいったらないわ。くっだらない。

裏切らない人間なんているわけがないでしょ。あたしはそんな人間たちばかりの中で過ごしてきた。まだ幼かったあたしを騙して、研究成果を横取りしようとする大人、そんな人間を何人も何人も見てきた。

親戚でさえそうだったのに、血の繋がりも何もない他人を信じるなんてそれこそバカのことだ。

だから家族なんていないあたしの周りには、敵しかいなかった。そんな中で過ごしてきたあたしが、どうやって人を信じるっていうの？

だけど、そんなことを面と向かって言われたのは初めてで、それを言われた時、少しだけ、ほんの少しだけ、何かよくわからないけれど、暖かい何かがぽつとあたしの胸の中に現れた気がした。それが何だったのかわかんないけど。

アスピオまでの道中でわかったことをまとめると、名前はライ。年齢は16か17歳くらいで、こいつの世界には魔導器、魔物、魔術がないこと。

文字は違うが、言葉は同じだということ。

テルカ・リュミレースにもこいつと世界と似たような文化があるらしいこと。

武術に長けていること（武醒魔導器もなしに魔物と戦ってのけた。特に剣術に長けているらしい）、そしてなによりとんだお人好しだということ、と言ったところか。

お人好しなんてもんじゃないわ。初対面の人間なんて普通は信じないでしょう！お人好し過ぎるにも程がある。言い方を変えればさっき言ったようにこいつはただのバカ。絶対いつか誰かに騙されるわね。

それから、この世界の仕組みに興味津々の様子だった。

遺跡を歩いている時なんかは、宝箱に興味津々で、見つけるたびに開けてもいいかと聞かれた。宝箱なんて普通滅多にお目にかかれるものじゃないらしい。というか本当にそんなものがあるのかと心底驚いているようだった。

さつきはあたしに偉そうに説教したくせに、あんたは子供か！と叫びたい気持ちを抑えつつ、勝手にすればとあしらった。
あんなもんで喜ぶなんて、バカっぽい……でも、別にさつき言われたからというわけではないけど、楽しそうにしているし、ま、いかと、そう思っている自分がいた。

そうして、こいつをアスピオに連れてきて一日が経過した。
本当、昨日は疲れたわ。ここの食堂の状態を見て絶句したかと思うと、あたしに食堂使用禁止令を出した。

「は！？意味分かんない！じゃあ何食べるっていうのよ！？餓死させる気！？っていうかそんなの出される筋合いないし！」

「いや、だめだ。毎日ファストフードなんか食べ続けてたら身体を壊す。せめて月一にしろ」

「だから、じゃあ何食べるってのよ！」

いやそもそも言うことを聞く必要はないのだが、売り言葉に買い言葉、こいつの意見を聞いてやろうじゃないか。

「そりゃあ、自炊に決まっているだろう?」

何を言っているんだとばかりに答える。

「誰が!? 言つとくけどあたし、料理なんてできないからね!」

ある意味屈辱的なことだが、あたしはどうだと言わんばかりに声高々に言い返してやった。

「…僕が、作る」

「あんた料理できるの?」

予想外だった。

「前に、知り合いのメイドに少し教わったことがある、から、多分頑張ればいける、と思う」

メイド? メイドってあの? こいつ貴族かなんかだったのかしら? ボンボンだったってこと? っていうか自信なさそうだけどほんとに作れるの?

「ま、あたしは食べられれば何でもいいし。作りたかったら勝手にしたら？」

ダメそうなら食堂に行けばいい。本当にあたしとしてはどうでもいいことだった。

その旨を伝えてやると、

「頑張るよ」

と意気込んでいた。

ちなみに、今日こいつが作った朝食は、非常に悔しながら美味しかった。

と、この男はあたしの食生活を改めるよう説教して来たかと思えば、さらには睡眠についてまで口出ししてきた。

2、3日寝ずに研究に時間を費やすなんてこの街では当たり前。集中していれば眠気なんて気にならない。

昨日だってせっかく見つけた新しい魔導器を夜に調べようとしていたら、もう遅いから寝ろと言いだした。

だからなんでそんなこと口出ししてくるのかと問えば、心配だからの一点張り。

しかし、あたしだってこればかりは譲ってやる気はない。意地でも机に張り付いて研究をしていたら、まるであたしを猫を扱うかの

ように抱え上げ、あっという間にベッドまで運ばれてしまった。
あたし武醒魔導器つけてんのに敵わないってどうしたことよ！？

「にゃ！ちよ、ちよつと何すんのよ！！あたしの貴重な研究時間を！！邪魔しないでったら！！」

家においたのは失敗だったか、と思った。まさか研究の時間を邪魔されるなんて思ってもみなかった。

「身体を壊したら、大好きな研究もできなくなるぞ？それに、ちゃんと眠ったほうが頭もよく働く」

「…っく」

正論だった。でも、あたしだって譲れない。魔導器の研究はあたしにとって自分よりも何よりも大切なことだ。

「今までだってそうしてきたんだから大丈夫よ！2、3日寝ないくらい平気よ！あんたはあたしのことなんか気にしないで自分のことだけ専念してなさいよ」

「リタ…2、3日も眠らない気でいたのか…？」

ここで墓穴を掘ってしまったことに気づく。夜更かし程度でこれな

のに、2、3日寝ないだなんて言うべきじゃなかった…。

「ますます心配になってきたんだが…リタは一体どんな生活を送ってるんだ？」

言い逃れできないと感じたあたしは、これまでの自分の生活を白状した。するとこいつはまるで憐れむかのような表情であたしの名を呟く。

「リタ…ダメだぞ。そんなんじゃ大きくなれないぞ？あと、今は若いから何とかなってるみたいだけど、大人になってからすごいツケが回ってくると思う…」

食生活の時点ではばいと思っていただけ、典型的な生活習慣病予備軍だとまで言われた。生活習慣病とか知らないわよ。なにそれ？と、聞けば、身体に様々な悪影響を及ぼす恐ろしい病気だと言う。真偽はわからないけど…少し恐怖を感じたのは秘密だ。

「そ、そうなの？で、でも別にあたしの身体がどうなろうとあんたには関係ないことでしょ！」

そう言うところいつは目を瞬いた。

「どうして、そう思うんだ？」

どうしてって、他人にどうしてこんな事言われなければならないのか、本気で関係ないじゃない！
あたしは心中を吐露した。

「言っておくが僕はもうリタのことを他人だと思っていない」

「はあ？どういうことよ？」

また意味のわからないことを言い出すつもりなの？

「僕にとって今、この世界で知っている人は正真正銘、リタ、君一人だけだ。言い換えれば、僕にとって今この世界で、リタが誰よりも大切なんだ。そう、君が魔導器を思う気持ちと同じだと思ってくれて構わない」

「たたた大切！？は、はあ？あたしはあんたなんて研究サンプルとしか見てないわよ！」

「はは、正直だな。そう、君は僕が今まで僕が出会ってきた人たちの中で誰よりも正直だ。その年でもう、生き方に迷いが無いのがわかる。だから信じられるし…そのぶん心配になる」

「…どういことよ？」

「そのままの意味だよ、わからなくてもいい…。けどとにかく、リタがどう思おうと、僕はリタが大切に、心配もするし、守りたいとも思う。そこはわかって欲しい」

「……………は、なにそれ…ほんと、ばか…っぽい」

あたしは今まで誰かに大切にされたことなんて無い。だからあたしには誰かを大切に思う気持ちなんてわからない。

だけど、まっすぐにこちらをみつめて大切だと述べる蒼い瞳を見て、あたしの胸の中は遺跡で感じたものよりも暖かい何かが広がっていくのを感じていた。

家族ってよくわからないけど、もしも家族がいたとするなら、もしかすると、こちらがどんなに嫌っても、鬱陶しいほどに大切に思われる、こういう感じなのかな、とそう思った。

（おやすみ、リタ）

（お、おやすみ…ってあんたはどこで寝るの？）

（適当に床で寝るさ）

（…：そ、そう）

（？…あ、そうだ）

（な、なにっ！？）

（リタのローブ貸してくれないか？少し肌寒いから…）

（あ、え、ええ、いいわよ）

（ありがとう）

くアスピオ Side・R・M（後書き）

リタSideで掘り下げてみました。キャラ崩壊してないといいなあ。

ちよつとくどい感じがしないでも無いですが…ええいこれもMyクオリティ！おい

とりあえずライリタイで家族とかなんという俺得状態。
需要はあるのか…

ご感想、評価等ありがとうございました。

感想、評価、アドバイスなどありましたらぜひ、お待ちしております。
す。

例えばこんな日常が（前書き）

オリキャラ出てきます。と言っても、ただのショップ店員に名前をつけただけです。

例えばこんな日常が

僕がリタの家でお世話になるようになって、もう一週間が経った。どちらかと言うと僕がリタのお世話をしてしまっている気がするが…

何故かって、本当に、リタを放っておけない。いや、放っておいてはいけない。

研究となれば朝も昼も夜も関係なく机と向き合っている。何も言わなければそれこそ三日三晩、あるいはそれ以上、眠ることなく研究し続けるだろう。

大好きな研究の時間を邪魔してしまうのは、まるで子供が大切にしているオモチャを無理矢理取り上げているようで、僕としても心苦しい。

しかし僕にとっては研究よりもリタの身体を大事にして欲しいのでそこは譲ってやらないけども。

夜遅くなったら必死に机に張り付いて離れないリタを、無理矢理抱え上げ、なだめつつベッドに運ぶのが日課になっている。

最初の頃はベッドに連れていっても、それはもう激しく抵抗していたのだが、最近は抵抗しても無駄だと諦めつつあるのか、ベッドに運ぶと大人しく寝て、その代わり朝早く起きるようになっていた。良い傾向ではないかと思っている。

そしてこの家の家事も僕が担っていた。起きている時のリタは研究に専念しているので、必然的に僕がやらなければならない。

しかもリタ、研究中は食事なんてないならないで問題ないらしく、放っておいたら何も食べずにずっと研究し続ける。

昔咲世子さんに教わったことがあるので、料理の基礎くらいはわかっていたが、あまりレパトリーがなかった僕は、図書館で知り合った、客がなかなか来ずに暇をもて余していた幸福の市場の女性店員、カトレアにいろいろと料理を教わったりした。

客なんて滅多にこないから相当に暇らしい。

おかげで僕のレパトリーはどんどん増えつつある。ありがたいことだ。

そう、それから勉強の方だが、なんとか早々にテルカ文字を覚えることに成功した僕は、アスピオの図書館で本を読みふけている。

本を借りて、リタの家で読んでも良いのだが、ただでさえリタの研究の邪魔をしている自覚があるので、出来る限りはそつとしておきたい。もちろん、昼食、夕食の時間になったら帰ってリタにご飯を食べさせる。

そしてリタはご飯を食べているとき、僕が図書館でわからなかったことを教えてくれたりもした。

リタに課題を出されて、その諮問に僕が答えるなんてこともあった。

とりあえずこの一週間での成果はテルカ・リュミレースの歴史と仕組みについてと言ったところか。

帝国とギルドとか、その辺りは理解してきたつもりだ。

だからリタに、僕がギルドで働くと言うのはどうだろうか、相談

を持ちかけてみたところ、

「あんたにはまだ早いわ、まだまだ覚えることはたくさんあるわよ！」

との手厳しい一言と、魔導器とか魔術とかのえらく難しそうな分厚い本を渡され、さらにはその課題を出されてしまい当分終わりそうもない。

魔術書なんていうものを初めてみたが、術式というものが分厚い本にずらーっと数十ページ、ひどいものは数百ページに渡って書かれており、あとはその解説のようなものが、またさらに書かれている。

どう考えてもこれ、相当に難しい本なんじゃないか、学者向けの本なのではないか、とリタに聞いてみたが、そんなことないわよ、の一点張り。

これを聞いたとき目を合わせてくれなかったのが妙に気になった…。

このままではずっとリタの家から自立出来ない気がする。リタが迷惑ではないと言うのなら、僕としてもやぶさかではないが…本当にここにいても良いんだろうか。

しかし正直、最近は自立の道は諦めつつある。というかできない。僕が出ていった後のリタの生活が心配過ぎて、正直仕事どころではないのではないかとさえ思うようになってきている。

だって、言わなきゃ食べない、飲まない、寝ない。
死んでしまうのではないかとさえ思ってしまう。

と、おっと、そろそろ夕飯の支度をしに戻らないと。

カトレアから食材を購入した。今日はコロッケにしてみようと思う。
リタの口に合えば良いんだけど…

そしてぼくは家に帰り夕飯の支度を始めた。

「…ねえ、あんただんだん料理うまくなってない？」

このコロッケ、美味すぎるんだけど、とリタが言う。

「え？そうか？嬉しいな、練習の成果が出たんだろうか」

カトレアのおかげだな。今度お礼を言わなくては。

「練習？あんた図書館で勉強してるんじゃないの？」

「ああ、してるよ。でも時々カトレアに料理も教わってるんだ」

「……カトレア？」

「知らないのか？図書館にいる、幸福の市場の人だよ。いつも食材とか、お世話になってるんだ」

「知らないわよ。店員になんて興味ないし」

「はは、まあリタはあんまり店を使うこともないだろうし、知らなくてても仕方ない仕方ないか」

「っていつかなんであんたいつも図書館で勉強してんの？」

ふとリタが僕に疑問を投げかけてきた。

「何でって、資料が一杯があるし、便利じゃないか」

「うちにも魔術と魔導器の資料くらいなら一通り揃ってるはずなんだけど？」

じいっとリタが僕を見てくる。

何か視線が痛い。

何かしただろうか？

ねえ、なんで？と問いかける視線が突き刺さる。

「リタの研究の邪魔しちゃ悪いなって…」

その問い詰めるような視線に耐えきれ無かった僕は正直に答えた。

「ふーん。あたしあんたに邪魔だから出て行って言ったことあったっけ？」

それは…

「いえ、無いです」

どうして僕は敬語なんだろうか。

「じゃあどうしてそう思ってるわけ？」

「リタお嬢様の夜中の研究時間をただでさえ邪魔してしまっておりますので、昼くらいは集中させてあげたいなと考えた所存であります」

もはや自分でも何を言っているのか分からなくなってしまっている。どうしてこんなに質問攻めされているのか訳がわからない。

「へー、ま、確かに夜中の研究時間は邪魔されてるわね。…でも、あたしが本気であんたのこと邪魔だって思ってたらどうしてると思う？」

につこり、笑いながらリタがさらに問う。わあ、リタの笑顔初めて見た気がするー、とそんなことを考えている場合ではない。怖い、なんだか怖い。

質問の答、それは、リタの性格を考えれば…

「…ファイアボールを放って無理矢理にでも追い出す…とか？」

「なんだ、よくわかってるじゃない。…じゃ、そーいうことだから」
って言うかなんかむしろ最近、あんたがいない方がどこで何してんのか気になって集中できないわ。
ポツリとそう呟いて食事を終えたリタは、僕の肩をポンポンと叩いて自分の研究へと戻っていった。

そう言うこと…っていうのは、もしかするとリタは暗に邪魔じゃないから家で勉強してもいいと言っているのか？
だったらお言葉に甘えて明日から家で勉強させてもらうことにしようか。

僕たちの一日は大体こんな感じだ。
だけど少しずつ、少しずつ何かが変わってきているような気がする。
もちろん悪い方向ではなく、良い方向にだと思う。

リタの態度も最初と比べると随分やわらかくなっているように思うし、心を許してくれつつあるのなら、それはとてもうれしいことだなと思う。

また夜が更けて来て、研究に勤しむリタを抱え上げてベッドに運ぶ。

余談だが、リタのベッドははしごを登った二階にある。前に一回だけ、一階で研究しているときのリタを抱えて、暴れるリタをなだめつつ二階へ運んだことがあるのだが、相当に苦労した。ちよつとコツがあつて、まず、…まあ、それはいいか。

ともかく、やはり、ベッドまで運んでしまえば大人しく寝てくれるようになつてくれていた。

本当は言わなくとも自分から寝てくれるのが一番なんだけどな。運ぶときに暴れたために乱れてしまったリタの髪をそつと直し、おやすみと声をかける。

すると

「お、おやすみ…」

と、少し戸惑い気味の様子だけど、ちゃんと返事が返ってくる。

きつと、こういうことに慣れていないんだらうなと思うと、そんなリタがなんだか可愛くて、愛おしくなつて、

昔、母が僕にそうしたように、昔、僕が妹にそうしたように、僕はリタのこめかみの辺りに軽く口付けた。

「はえっ！？ なななななにを！？」

「え？ ああ、ごめん。つい」

本当に無意識だった。

僕が王位を手に入れる前までは寝る前は母や、妹にそうするのが日課だったのだ。

それを思い出して、つい。

「つい！？ついでこんなことしないでしょ普通！？」

リタは顔を真っ赤にして、相当ご立腹のようだ。申し訳ないことをしてしまった。

「おやすみの、あいさつ…昔、母と妹とやっていたから、つい」

「え？あ、あんた妹いるの？」

「ああ……いるよ」

正確には、いた、けど、わざわざ眠る前にもういないなどと言うて空気を重くする必要もないだろう。それに、どっちにしたつても会えないのはいっしょなのだから。

そう思った僕は、リタに少しだけ嘘をついていた。

「ふん。会いたくないの？」

「…ああ、会おうとは思わないな」

そんなのは嘘だ。

本当は、会いたくても、会えないだけ。

だけど、会えたとしても、一体どんな顔をして会えというのか…しかし、会いたくないのも本音だ。

嘘と本当がどんどん混じりあって、どれが本当なのかいつかわからなくなってしまうそうだなと思った。

「ねえ、家族って…どんな感じなの？」

どんな感じ。そう聞かれると難しいかもしれない。

僕の場合、家族のいないリタとは全くの正反対で、信じられるのは母と妹しかない、という状況の中で過ごしてきた訳だ。

僕の中の家族像は、ごく普通の家族像とは異なるものかもしれないと思う。だけど、答えないわけにはいかない。

言葉を選んで、リタに答えた。

「大切な、ものだよ。かけがえのない、大切な」

大切なものだった。母と妹を守りたかった。二人に笑っていて欲しかった。自分の命なんて惜しくもなかった。

そう、それはすでに過去形で…二人はもういなくて、なのに僕はここにいて、全て僕が壊してしまったのに、僕だけがここにいる。

どうして僕は生きているんだろう。僕がここにいる理由はなんなのだろう。どうして――

「……わかんない」

少し拗ねたようなリタの言葉で、はっと我に返った。いつの間にか

思考の波に入りこんでいたようだった。

だめだ、こんなことを考えていてもキリがない。考えれば考えるだけ思考が悪い方へと向かっていってしまう。

「わからない、か…。そうだな、でも僕にとっては今の生活とそう変わらないよ」

そう言っただけ僕はリタに笑いかけた。

ここ最近のこの家で時々流れる空気は、家族と呼んでも差し支えないものだと、僕は思っている。
優しくて、暖かい時間。

「そう……なの？」

驚いたかのようにリタが目を丸くしている。

「そうだよ。…僕は好きだよ、この生活。と、もちろんリタも」

「ば、っぱつかじゃない！も、もう寝るから！おやすみ！！」

この優しい時間が、僕なんかのためじゃなく、リタのために続けばいい。

僕がここにいるのは、きつとこの子を幸せにするためなのだと、そ

う思わずにいらなかった。
僕の勝手な思い込みでも構わない。

—— 今度こそ、平和な日常を守りぬいてみせる。もうあんな過ちは、犯さない。
これは罪滅ぼしなんかじゃなくて、挑戦だ。

（かぞく……こういのが……かぞく……か……悪くない、かも……？）

（そつえば、最近夜は冷えるな……なんか寒い……）

例えばこんな日常が（後書き）

The 過保護！

あれ？ライ、若干病んでる？

いやいや、気のせい気のせい。過去を絶ち切ってもらわないと…いつまでも決着つかなくて無限ループ入っちゃいますよ…。

僕は…過去を断ち切る！とでも叫んでもらったら一瞬で解決しますけど（笑）

まあ、黒の騎士団編でもそんな過去に苛まれたりはしていなかったはずなんで、うじうじ考えるのはライらしくないですね。

新しい土地でちよっとナーバスなんですきつと。

そう言えば、リタの好物なんだったかと攻略本引つ張り出してみたら片手で食べられるものと、甘いものしかなかったことに愕然としました。

ごはん！と言う感じがするのコレッケだけでどうしようかと（笑）

ご感想、アドバイス等ありましたら、よろしく願います。

きっかけ

寒い。

リタの家に来て早2週間とちよつとが経過した。

時計を見ると今日はいつもよりも遅くに目が覚めてしまったようだった。だけどリタはまだ眠っているらしい。

それにしても先程から震えが止まらない。寒すぎる。

無意識に身体がガクガクと震えてしまい、気を緩めれば歯までカチカチと音を鳴らしてしまいそうだ。

もう、冬になるのか…一気に冷え込んだんだな…

とにかく朝御飯を作らなければと起き上がろうとしたのだが、身体に力が入らない。

おかしいと思いつつもなんとか身体を起こし、立ち上がる。

すると、リタも起きたのか2階から下へと降りてきた。

「…おはよう、リタ。なんだか今日は一気に冷え込んだみたいだな…寒くて仕方ない」

「お、おはよう。今日はあんた起きるの遅かったみたいじゃない…って寒い？むしろ昨日よりは暖か…ってちよつとあんた一体どうしたの！？」

「…何がだ？」

何を突然驚いているのだろう。

「顔色が！赤いつていうか青いつていうか…紫よ！？」

「いや、紫なんて…あり得ないだろう」

それではチアノーゼだ…死にかけてではないか。

「…とにかく変よ！？」

「大丈夫だ…。ああ、そうだ、ちょっと待っててくれ…今からご飯…」

ふらあつと身体から力が抜け、そのまま床に倒れ込みそうになる。
なんとか踏みとどまったので大事はなかった。

「っちよつと！何やってんの！？」

リタが慌てた様子で駆け寄って来る。

「いや、ちよつと力が…あ、あれ？なんか…ちよつと色々無理かもしれない…」

身体が重い、寒い、頭もガンガンと痛くなってきたし、節々の痛み

もひどい。

正直しんどい。こんな感覚初めてだ。

僕は立っていらなくなり思わず倒れ込んでしまう。

「え？きやつ！ちよつ！？…って熱っ！！」

とつさにリタが支えてくれたおかげで床へ顔面ダイブは免れた。

僕の身体が熱かったことに驚いたのか、リタは手を僕の額へと当てた。ひんやりとした手のひらが心地いい。

どこか懐かしい感触に、僕は思わず目を細める。

「……………う、すまない。風邪をひいたみたいだ…」

立ち上がるうと試みてはみたものの、失敗し、支えてくれていたりタへますます身体を預けてしまう形となってしまう。

「いや、これ風邪ってレベルじゃないわよ！熱なんか40 近いじゃない！！寝起きでこの温度って…」

39.7 を示した体温計を見せられた。たしかに高い…。

そしていつの間に計ったのだろうか？全然気がつかなかった…僕は一瞬意識が飛んでいたのか？

「だ、大丈夫なの！？と、とにかく！立てる？はしご登れそう？」

「はじい…どうして…？」

「ベッドは二階でしょ！？意識があるうちに登っというて…！」

倒れられたらあたし一人じゃあんた運べないでしょ！とリタが言う。

「え？だけどベッドはリタの…」

「そんなのどーでもいいから、とつとと登りなさいよ！」

朦朧とする意識の中、リタに言われるがまま、僕はリタに助けられつつも二階へと登り、ベッドに横になった。はしごとは、思っていたよりも重労働だったらしく、かなりキツかった。

そして、先程までリタが眠っていたためか毛布が温かい。そういえばこちらへ来て初めてベッドに横になった。久しぶりの感覚で、すごく気持ちがいい。

すると、リタは僕を寝かせたことで少し落ち着いたのか僕にいくつかの問診を行ってきた。

寒気はいつからあったのかとか、他にどんな症状があるか、身体に違和感はないか、皮膚にどこか異常はないか、様々な質問をされてしまう。

そういえば、先週から寒かったなと言えば、そんなに前からだったのか、なんで早く言わないのかとリタに激怒された。

こういう気候だと思っていたのだと言えば、そんなわけがあるかとまた怒られた。そんなことを言われても、僕だってテルカ・リュミレースの一年の気候を把握しているわけがないので仕方がないと思うのだが。

問診以外にも、口の中を見られたり、リンパ節が腫れているか確認されたり、まるで医者のようなだった。

魔導器だけでなく、医学の知識にまで長けていたことにすごく驚き、それを言つと、ちょっとした暇つぶしに医学書を読んだことがあるだけだとの答えが返ってきた。

暇つぶしで医学書とは…またすごいな。

「これは…おそらくパラミウイルスに感染してるわね…寝てれば治るなんて悠長なこと言ってるんじゃないわ…早くワクチンを打たないと…！」

大変なことになるかもしれないとリタが言う。

「ウイルス…？…って、リタは大丈夫なのか？」

僕は思わず起き上がってリタの身を案じた。

「いいから寝ときなさいつつつてんでしょ…！」

しかしリタに頭をぐいと押され、僕は再びベッドに横になった。

リタが言うには、このウイルスは大抵は幼い頃に内に終わらせているもので、一度感染してしまえば終生免疫が残るので平気らしい。

「そりゃそうよね…異世界から来たって言うんなら、この世界の細菌とかウイルスに耐性があるってほうがおかしいもの」

迂闊だったわ…とつとあんたの血液でも調べてればすぐにわかったことだったのに…情けない、とリタは嘆く。

このウイルスは大人になってから感染してしまうと重症化しやすいところが厄介なのだそうだ。

「別に、リタが落ち込むことじゃないだろう…？僕の体調管理の甘さが招いたことだし、こればかりはどうしようもない…。気にしないでくれ…」

そう言いつつ、再び意識が朦朧としてくるのを感じた。とにかく寒さがひどい。次に頭痛、何を考えるのも億劫だ。

そう言えば喉も痛いし、熱は高かったしで、話すのも聞くのもそろそろ限界かもしれない。

リタが早くワクチンを打ってしまえばすぐによくなるからと、励ましてくれた。

リタがこんなに心配そうに励ましてくれるなんて…僕はそんなに死にそうな顔でもしているのか…と逆に不安と言っては失礼か、申し訳ない気持ちになる。

そしてリタは僕の状態を確認したかと思うと、すぐに医者呼んでくるからとリタは後ろを向き、家を後にしようとした。
しかし

「っ！？な、なによ？」

気が付いたらリタの腕を掴んでしまっていた。
どうして掴んでしまったのだろう、すぐに手を離れた。

「あ、すまない……」

「べ、別に、いいけど。どうしたのよ」

「いや……なんでもない……」

自分でもどうしてこんなことをしてしまったのかよくわからない。
熱に浮かされたのかもしれない。

身体は最高に重いのに、頭はふわふわしている。
子供みたいなことをしてしまったなと、すごく恥ずかしくなって、
思わず毛布を頭まで被って顔を隠した。

「……っ、とにかく行ってくるから！あんたは大人しく寝ときなさいよね！」

「……うん」

今度は引き止めてしまうようなこともなく、リタは勢い良く家へ飛び出して行った。

「リタって、あんなに足、速かったのか……」

毛布の隙間からそんなリタを見送って、僕は意識を手放した――

――長い夢を見ていた気がする。

誰かが僕のことを見守ってくれているような、手を握ってくれたり、タオルを交換してくれていたリ…そんな夢。

額がひんやりとして気持ちいい。あれ？これは、夢ではない？

僕は違和感を感じ、目を開く。

「…リタ？」

目を開くとそこには驚いた様子のリタの姿があった。

「っ！ライ！？」

額には濡れたタオルが置かれており先ほどのひんやりとした感覚はこれだったのだとわかる。

「…どうしたんだ？そんなに驚いて」

「どうしたんだ？じゃないわよっ！！あんたもう一週間以上ずっと眠ってたんだからね！！魔されてたり、目が覚めたのかと思っても

ずっと意識が朦朧としてるみたいだったし…」

「一週間…？」

時計を見れば今は9時らしい。おそらく、夜だろう。

ただ夜の9時と言えば、リタはまだ研究にのめり込んでいる時間のはずなのだが…。

というか一週間というのは本当か？

そんなに眠っていたのか？

少し信じ難い。僕感覚ではさっきリタが家を飛び出していったようなものである。

「もう、二度と目、覚めないんじゃないかって！このままちゃんと目覚めなかったらどうしようって…」

そう言い切るとリタは後ろを向いて顔を隠した。

肩が少し震えているようだった。泣いているのか？

そう感じた僕はベッドから、まだ少し重い身体を起こし、ベッドサイドに腰掛ける体勢になり、リタの腕を取った。

そうして、リタにこちらを向かせてみるとリタの瞳は涙で揺らいでいた。

それを見た僕は思わずリタの腕を引き寄せて抱きしめる。

その身体は思っていたよりもずっと細くて、折れてしまうのではないかという錯覚に陥ってしまうほどだった。

「すまない。心配かけてしまった…もう大丈夫だから」

「っ誰が！心配なんか！あたしがあんたの心配なんかするわけないでしょ！？」

そう言いつつもリタはぎゅうと抱きしめ返してきた。

僕もさらにリタを抱きしめ、震える背中を撫でる。

リタは僕の胸に顔を埋めて下を向いており、表情を読み取ることは出来なかった。

「そうか…でも、ありがとう」

「なんのお礼よ。あたしは何もしてないし、できなかった！あれから何日も何日も目を覚まさないで、ずっと苦しんでたあんたを、あたしは見てることしかできなかったのに！」

何もできなかったと、リタは自分を責めているようだ。

「そんなことない。…このタオル、リタがやってくれたんだろう？それに、すぐに気がついて慌てて医者呼びに行ってくれたじゃないか。ちよつと不謹慎だけど、嬉しかったよ。僕だけだったら絶対ただの風邪だと思ってそのまま、もっと大変なことになってたはずだ」

今こうしていられるのはきつと、間違いなくリタのおかげだ。

「ありがとう。本当に助かった。ずっと看ていてくれたんだろう？」

「っ馬鹿ライ…！本当に、死んじゃうんじゃないかって…あたし…」

「ごめん。こんなことになるとは正直僕も想像してなかった。それから……目が覚めた時思ってたんだけど、初めて名前、呼んでくれたな」

…なんだか凄く嬉しい。

今までずっと『あんた』とか、『ねえ』とかばかりで、固有名詞で呼ばれることなんて無かったから。

「なっ！？…う、うっさいわね！どうでもいいでしょそんなこと！」

「どうでもよくないことはない。僕にとっては大きいことだ。…またこれからよろしく、リタ」

「…次倒れたりしたら、もう知らないからっ…」

「はは、気を付けるよ。でもウイルスばかりは…どうしようもないな」

まあ、細菌でも感染力が強いのが来たらやばそうだけど。

この世界において、僕の免疫は産まれたばかりの赤子並ということだろう…？

ちよっとこれからは覚悟が必要かもしれない。

「…そこはあたしが対策するから、心配要らないわ。こうなったのはあたしの見通しが甘かったからだし、もう同じ失敗は繰り返さな

い」

と、リタからの頼もしいお言葉を頂いた。

「失敗から学ぶ、か。…それは、研究者魂ってやつ？」

「……そうよ。悪い!？」

「…いや、凄いなと思って。うん、カッコいい」

その返答に僕としては思うところはあったが、そこは言わずに簡単な感想だけを述べた。

「…なによそれ。なんか裏がありそうな……っていうか!! ちょっと! そろそろ放して」

そう言われてみれば、ずっとリタを抱き締めたままだった。

だけどリタ、放してと言う割に僕の背中に腕を回したままなのはど
ういうことだろう？

「うん、じゃあリタが先に放してくれたら放す」

「そ、そっちが先にやってきたんだから、あんたから放しなさいよ
!」

「いや、リタからどうぞ」

「いや、ライからでしょ!! じゃないと降りられないじゃない!」

「別に僕はこのままでも構わないんだが？」

「な！？ばっ！何言ってるの！？」

「ん？そのままの意味だが…聞えなかったか？じゃあもう一回言…いい！言わなくていいから！！」

やいのやいの言い合うこと数十分、体力的にキツくなってきた僕が折れ、身を放した。

「ま、まだ、治った訳じゃないんだからもう一回寝ときなさいよ。あ、でも、その前にご飯…食べれそう？」

「ああ…食欲は…特にない…な。けど別に平気だよ」
そう答えるとリタは大きなため息をついた。

「はあ…あんたって、あたしには口うるさい癖に、自分のことは棚に上げるわけね…」

「う…そう言う訳じゃ…本当に、お腹空いてなくて」

「一週間、ともに食べてないの？お腹空いてないから大丈夫？へーえ。あんたって素晴らしい身体してるのねー。是非ともあたしも見習いたいわー」

「あ、あー…そう言えば急にお腹が空いてきたー。軽いものが食べたいなー。何か軽く食べられるようなもの、あるのか？」

「……作ってくる」

リタが…料理？できるのか？

ここに来てから一度も料理していると看たことないんだが。心配だし不安だ。

「…な、何よその顔。あ、あたしだって簡単な料理くらいはできるんだからね!？」

「い、いや。やっぱり今はいい、悪いし。明日起きたら食べるから、僕はもう寝かせてもらう」

「ちょ!？なによそれ!？ライ!？あ、こら!布団にもぐるなー!」

布団に潜り込むと、リタに激しく身体を揺さぶられた。

あれ? 布団と言えは…

「リタ、僕ここで寝ていてもいいのか? というか今までリタはどこで…」

僕は布団から顔を出してリタに尋ねた。

「は、話を変えるな! ……ここよ」

リタは怒りつつも答えてくれ、その場所を指差す。

それはベッドの下…という言い方ではホラーになってしまいかねないか、ベッドの隣の床、要するにベッドから降りたところ、その場所だった。

たしかに、床には毛布が置かれていた。

「うわ、ごめん！身体痛くないか？冷えてない？大丈夫か！？すぐに代わる！」

ベッドを借りたときはそこまで頭が回らなかった。

慌ててベッドから降りようとした。

布団から出れば、まだ寒気は感じるがそんなことはどうでもいい。

「…一週間ずっと魘されてたやつに言われたくないわ。いい？あんな熱が今日やつと下がったばかりなのよ？しかも下がったなんて言ってもあくまでピークと比べて下がっただけであつて、一般から見ればまだ十分に熱高いの。いいからそこで寝なさい」

「だが…リタが床で寝ると知ってしまったからには、僕だけがベッドを使うわけにはいかない」

「うっさい！病人は黙って寝ときなさいっ！！」

「断る。もう僕は大丈夫だ」

「なっ！？何だよ！？良いから寝なさいってばっ！」

「うわっ」

リタに思いきり押され、ベッドに倒されてしまった。

「ほらみなさい。いつものあんただったら、こんなちよつと押したぐらいで倒れるわけないもの。なーにが大丈夫よ！またぶり返す前に寝ろっつってんの！！」

こうなったら…ぶん殴って眠らせるしか…

と、リタから不穏な言葉が聞こえてきた。しかも手には鈍器と言っても差し支えないほど分厚い本が握られている。

「リ、リタ？それは、流石に、冗談だろう？」

「冗談？あたしはいつだって本気よ？」

それこそ病人にはキツイ冗談だ。

本を持ってじりじりとにじり寄って来るリタに言い様のない恐怖を感じる。

「よ、よし、わかった」

「…なに？ようやく素直に眠る気になった？」

「一緒に寝よう」

「……………は？どどどどうしてそうなるの！？」

僕はリタを床で寝かすわけにはいかないし、リタは僕にベッドで寝ろと言う。

どちらかがベッドから追い出されるのがダメなら、もういつそ一緒に寝ればいいのではないか。

この両者譲る気の無いこの場を鎮めるためにはそれが最も良い選択

肢だと考えたというわけだ。

「大丈夫、リタは身体が小さいから余裕で二人寝れる」

「え？そそそそういう問題じゃないでしょ！？」

「ん？どういう問題があるんだ」

二人ともベッドを使って眠れて万々歳ではないか。

「そ、それは……」

「それは？」

「……っ。ないわよ！！わかったわ！寝てやるっじゃないの！！」

「ん、じゃあ壁際どうぞ」

リタは寝相が悪い方なので、壁際でなかったら床に落ちてしまうだろうことは目に見えている。

そう思い、僕はベッドから起き上がりリタを誘導する。

するとリタはそろそろと動き出しベッドの壁際に横になった。

リタがちゃんと横になったのを確認して、布団をかけ、僕も横になる。

一人で寝ていた時よりも、断然暖かい。

「リタ、あつたかいな」

「あ、あんたはあつたかい通り越して熱いわよ」

そう言われればそうか、熱がまだちゃんと下がっていないんだった。熱があると自覚すると余計にダルくなってしまう。布団の暖かさと相まって今にも眠ってしまいそうだ。

「…明日には下がると、いいんだけど…おやすみ、リタ」

「お、おやすみ…」

そして僕は再び眠りについた。

(……う、さむ……)ぎゅう

(きゃっ!??ちよ!??…眠れる気がしない……)

きっかけ（後書き）

書いてみたかったことを詰め込みました。

自覚無いままにイチヤついて欲しかっただけです。名前呼ばせるきっかけが、何か無いかなと。

兄妹でも恋人でも見たい方に見えたらいいなあと思って書いたんですが、そんな微妙な書き訳がこの私にできるはずもなく…どうでしょう？

取りたい方に取っていただけたらと思います…切実に。

あとはこのリタサイドでも書けたらとりあえずは満足かなあ…

本編…本編か…うーん…

あと、ウイルス名は、適当なウイルスの科の名前から若干文字って使いました。その科の症状を参考にしつつ、本当に適当です。違う科の症状も取り入れたかも知れませんが。しかしあくまで異世界のウイルスと言っことで…（汗）

長くなりましたが、

ご感想、アドバイス等ありましたら遠慮なくお願いします。

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3498z/>

失色の明星～約束～

2011年12月27日01時45分発行